



友人が天才であることに  
気づいてしまった  
あなたへの処方箋

6月11日

Sudden Fiction Project

高階 經啓  
hirotakashina

## 6月11日のおはなし「友人が天才であることに気づいてしまったあなたへの処方箋」

---

これは友人が天災であることに気づいてしまったあなたへの処方箋です。

失礼。打ち間違えました。変換ミスです。

これは友人が天才であることに気づいてしまったあなたへの処方箋です。

処方箋を出す前に、本来ならば問診から始まり、視診、聴診、触診、打診、といったプロセスを経なければなりません。処方箋が必要だということはあなたは何らかの不調を覚えていることになりまますから、その不調が何なのかきちんと把握しなければ、正確な診断も望めませんし、ましてや適確な治療方針が立つはずもありません。それでは処方箋の出しようもありませんよね？

しかし、まあいいでしょう、細かいことを言うのは。だってそうでしょう？ あなただってそんな七面倒臭い手続きを踏みたくはないでしょう？ いや仮にあなたが七面倒臭い手順が大好きな人だったとしても、ここはひとつ諦めてもらいましょう。だってぼくはそんなのごめんこうむる！ という気分だからです。

ごめんこうむる！ って可愛いですね。秋になって草が枯れ始めた村はずれの細道をかさかさ音を立てて歩いているアルマジロみたいな感じがする。そのアルマジロを眺めているとそれだけでその日あった嫌なことがふるふると胸の奥でほどけて落っこちて消えてなくなるような気がする。ああそうだ。もちろん、それは夕方なんですよ。まだ暗いと言うほどではない。でも、もうそろそろ一日が終わろうとするそんな時間帯。

あなたは天才になりたいですか？

失敬。問診はしないなんて言っているながら結局聞いちゃいましたよ。天才はいいですよ。なんていうか、天才って感じがしてね。ぼくも時々は天才になってみたいと思っております。あなたはどうですか？ 天才になって羽を伸ばしてふわりふわりと空を舞うんです。人々が集まってお喋りしている様子を、建物の軒くらいの高さからそっと覗き込むんです。そしてたまにそのおしゃべりの声の渦めがけてダイブする。すると彼らの会話がちょっと途切れて、そして彼らが言うんですよ。「天才が通り過ぎて行った」って。

冗談冗談。それは天使です。「天使が通った」が正解です。知ってますよ。知ってますともそれくらい。でもまあ天才は天使に近い。だって冷静に考えてご覧なさい。tensai. tensi. ほら「a」があるかないか、それだけの違いです。「a pen」と「pen」の違いなんて、日本的にはもう全然気がつかないですよ。

天才は、あるいは天使は、空を飛びます。重力なんて関係ないんですね。万人を等しく縛り付

けているはずのものから軽々と解放されている。同時に天才は、あるいは天使は、目につきません。フランス人に“Un ange passe.”なんて言われちゃって、結局誰の目にも入ってないわけです。憧れはするけれど本当のところちゃんと見てくれる人なんていやしないんです。

でもそれで天才が、あるいは天使が、天才であることを、あるいは天使であることをやめたいと思うのでしょうか？ これはとても大事な疑問です。メモしておいてもいいくらい大事な疑問文です。天才は、あるいは天使は、天才であることを、あるいは天使であることをやめたいと思うかどうか。

どう思います？ 「時々思うんじゃないか」？ へえ。どうしてそう思います？ 「孤独だから」？ なるほど。

正解は。ブブー！ 思わないんです。思わないんですよ。これは本当です。ぼくは知っています。なぜか。なぜなら、天才は、あるいは天使は、自分が天才であることを、あるいは天使であることを知らないからなんです。知らないわけではないだろうって？ いや、知らないんです。まわりからワイワイお前は天才だ、あるいは天使だって言われるじゃないかって？

アッオー！

聞いてました？ ぼくの話、聞いてました？ ねえ。ちゃんと注意深くし聞いててくれないんだったら、処方箋は出しませんよ？ いいですか。天才は、あるいは天使は、目につかない。誰の目にも入っていないんです。目に入らないものに向かって「おまえは天才だ」あるいは「おまえは天使だ」なんて言えますか？ あなたは言いますか？ 言わないでしょう？ そう。誰も言わない。そんなことは言わない。

ぼくはね、時々考えます。天才であることとは、あるいは天使であることとは、どういうことなんだろうって。そうでない状態と比べて何が違うんだろうって。そうするとね、ひとつだけわかるんです。彼には、あるいは彼女には、そうすることしかできないんだって。どこかの誰かが百万言費やして天才でない方が孤独でない理由や天使でない方が楽しい理由を並べ立てたって、そんなのこれっぽっちも聞こえやしないんです。外国語よりもわからないんです。フランス人にいきなり“Un ange passe.”って言われて何を言っているのか聞き取れなくて困惑するよりも無意味なんです。

でもこれもまた無意味な妄想です。だってね、誰も天才、あるいは天使のことは見えないから、だからそんな天才あるいは天使に向かって百万言を費やすなんてことも起こり得ない。もっと言えば、天才は天才であることを気づかれないから天才なんです。天才であることを気づかれるのは、その人がもう天才でなくなった時なんです。多くは死んだ後。さもなくばもっと違った形

で天才であり続けることができなくなった時。

だからね。友人が天才であることに気づいてしまったあなた。安心してください。その友人がぴんぴんして活動しているなら、その人は天才ではありません。だって天才なら見えるはずがないから。そしてもう天才としては活動できなくなっているのなら、その時はその友人が天才だった時代を正しく評価できる人間の代表として、あなたの気が済むようにすればいいのです。

その友人がどのように天才であったかを語り伝えれば友人はあるいは亡き友人は喜ぶかもしれませんが、でも、たぶん、実際のところは、その友人は特にどうも思わないと思います。だからことさらに語り伝えたりする必要はないでしょう。第一面倒臭いしね、そんなこと。

さもなくば。さもなくば、あなたの胸に秘めておいて、折に触れて友人は天才だったなあと思えば、友人あるいは亡き友人は喜ぶかもしれませんが。内容はともかく、自分のことを思い返す人がいると言うのはシンプルに嬉しいことです。これはいい方法だと思います。だからぼくがお勧めする処方箋はこれです。

時々思い返してやること。

ただし、どっちみち、ご友人は、思い返してもらったことで喜んだり有り難がったりする手合いではないので、そんなに熱心に思い返す必要はありません。ほどほどでいいでしょう。生きていようとしまいと相手はあなたが思い返してあげていることに気づきさえしない可能性もあります。そんな薄情な輩に振り回されることはありません。まったく。最初に変換ミスをしました。天才が友人にいるなんて、ある種の天災と言ってもいいのですから。

(「友人が天才であることに気づいてしまったあなたへの処方箋」 ordered by atohchie-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

## 新作スタート。お題募集中。

---

2011年10月1日。

Sudden Fiction Projectの新作発表が始まりました。

1日1篇ペースをめざしていますが、これはどうなるかわかりません。  
毎日、その日のお題を見て、いきなり書き始めていきなり書き終わる。  
即興的に書くSudden Fictionをこれからお楽しみください。

お題募集中です。

「[急募！お題](#)」のコメント欄で受け付けています。  
どなたでも気軽にご注文ください。初めての人、大歓迎です。

(お題の管理上、TwitterやFacebookでは見逃しがちなので、  
どうか上記コメント欄をご利用ください)

それではこれからしばらく新作のシーズンをお楽しみください。

※発表済みの作品をご覧になりたい方は  
「[SFPインデックス \(ただいま作成中\)](#)」  
をご活用ください。

友人が天才であることに気づいてしまったあなたのための処方箋

<http://p.booklog.jp/book/40911>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/40911>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/40911>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社paperboy&co.